

イタリティを失って平和主義と利欲主義におちいる。このような段階に達した国民の人口は外部社会から強い出生力をもった優質人口を移入して国民の血を若返らせなければ、やがて滅亡にひんするであろうとジニは考えている。

一世紀前の出生力の低下を分析したジニの概念には社会有機体説的思考や優生思想など今日では受入れられない概念も含まれているが、出生力の低下によって国民人口はやがて「老齡期」に達し、国民はバイタリティを失ない、そのままでは滅亡に向うとの指摘は、出生力が極端に低下した今日の西洋文明の一部イタリア、ドイツ、スペインなどに対してより厳しい警鐘を鳴らしているのではあるまいか。

明治以来西洋文明に追随し、西洋化をひた走った日本も出生力が極端に低下しているから同じ滅亡の道をたどっているとはいえないか²⁾。

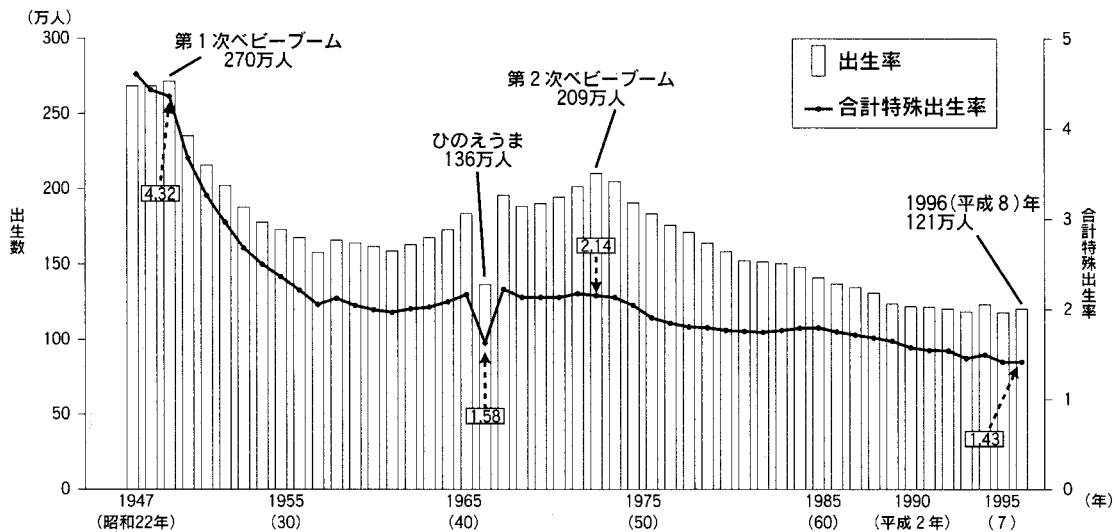
しからは、何故、日本の出生力はこのように低

下したのであろうか。またその対策をどのようにすべきかを考察することは喫緊の課題といえよう。

そこでこれに対応して1997（平成9）年には人口問題審議会が「少子化に関する基本的考え方について」という報告書を公にした。ついで首相の諮問機関として「少子化への対応を考える有識者会議」も設けられた。また本年（1998年）の「厚生白書」には出生力の低下について詳細な説明がなされている。さらに政治家の発言やその他の識者の論考も多数発表されるようになった³⁾。ここでこれらの論考の一部にふれながら出生力低下の問題を考えてみよう。

(1) 戦後日本の出生力の動向

そこでまず1998年度の『厚生白書』を素材にしながら、第2次大戦後の日本の出生力の動向をさぐってみよう。



資料：厚生白書（平成10年版）9頁
厚生省大臣官房統計情報部「人口動態統計」

図1 出生率および合計特殊出生率の推移

- 「人口大事典」平凡社 1957年 80～82頁 124～129頁
倉田和四生『都市化の社会学』1970 法律文化社 17頁
山本肇『少子亡国論』かんき出版 1998年5月
- 梶山静六「日本興国論」『文芸春秋』1998年6月号
林道義「女が子供を生まない本当の理由」読売新聞社『This is 読売』1998年9月号
宮島洋・宮本みち子「子供が増えない理由」および船橋恵子「子育てから<子育て>へ」毎日新聞社『論座』1998年9月号
和田秀樹「少子化社会は恐くない」PHP Voice 1998年11月号